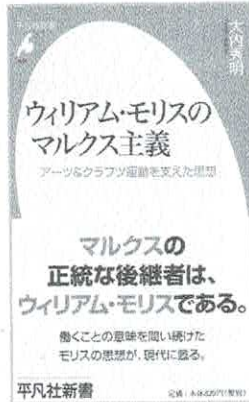


大内秀明著『ウィリアム・モリスのマルクス主義——アーツ&クラフツ運動を支えた思想』
(平凡社新書 2012年6月)

評者 半田 正樹 (東北学院大学経済学部教授)



19世紀後半のイギリスで活動したウィリアム・モリスの名を、現在どれだけの人が知っているだろうか。仮になじみがあるという場合でも工芸家、装飾デザイナーとしてイメージしている、そんなケースがほとんどではないだろうか。モリスが手がけた草花や樹木をモチーフとする

テキスタイルや壁紙は、いまなお現代人をとらえて離さないからである。

本書の最大のかんどころは、現代人をも魅了してやまないモリスの芸術・芸術作品が、実は近代を相対化する思想と切っても切れないことを、21世紀のいま丹念に解き明かした点にある。

近代の相対化。近代が資本制経済社会の成立・発展と重なる時空概念だとすれば、近代の相対化とは資本制経済社会のオルタナティブを示すことを意味する。従来、資本制経済社会に代わる社会というのは、「社会主義」社会とよばれてきた。

著者は指摘する。「社会主義」は、種々の系統に枝分かれしつつも、この国において久しく典型であったようにいわばエンゲルスを淵源するマルクス・レーニン主義に基づくソ連型国家社会主義として、また西欧においては社会民主主義、具体的には福祉国家主義としてとらえられきた、と。

しかし、まずソ連型国家社会主義が崩壊し、この国の標準的「社会主義」モデルが消失する一方、西欧の社民型モデルも大きな政府という重みに耐えられなくなり大きく沈んでしまった。また、ソ連の崩壊によって唯一の超大国となったアメリカもすでに金融覇権戦略の破綻によってあらたな資本制の発展の展望を見出

せなくなっている。

すなわち、いよいよ近代の相対化、資本制経済社会のオルタナティブをあらためて構想し、提起すべき地点に立っているというのである。

著者は、ここでモリスの社会主義をいわば究極のオルタナティブとして提示する。

ではモリスの社会主義とは何か。マルクス・レーニン主義とも西欧社民型とも截然と区別されるその内実とはいかなるものか。

何よりも、芸術と一体となった社会主義というのが軸芯をなす。たんに私有の廃止を主張したり、生産力の向上や富の増大に基づく社会をめざすというのではなく、生活日常を美術工芸(ファイン・アーツとクラフツ)でくむことを理念とする社会にほかならない。「生活の役に立たないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」というモリスの箴言がこれを端的に表現する。その背景にあるのは、機械制大工業による大量生産品とは違う、ものづくりの匠が生み出す工芸品のもつ固有性を至上とする姿勢である。これは「芸術は労働における人間の喜びの表現である」と見抜き、資本制経済の賃労働の廃絶を透視したモリスの労働観ともつながっている。

しかも本書は、こうしたモリスの思想が、実はマルクスをテキストとして、その徹底解説を通して形成されたことを明らかにしている。ちなみに本書は、日本で『資本論』が紹介されたのは、山川均がモリスによる解説を翻訳し、「大阪平民新聞」に連載したのが最初だったことも突きとめている。

匠・職人が協同するギルドをモデルと考えるモリスのアートとしての「共同体社会主義」。

本書は、近代科学技術文明の省察を迫った「3.11」を経たわたしたちが、あらためて近代の相対化を思考する際の引照すべき一冊となるのは確実である。

(著者の大内秀明氏は、東北大学名誉教授)